

# 日中女性作家が描いた中国残留孤児像

——山崎豊子『大地の子』と嚴歌苓『小姨多鶴』を読む

単援朝

✉ shan@ed.sojo-u.ac.jp

This paper describes a comparative study of *The Son of Earth*, a novel by Toyoko Yamasaki and *Auntie Duohe(Tazuru)*, a novel by Yan Geling. Even though the same topic was used in these two novels, the method of novelization was different. *The Son of Earth* by Toyoko Yamasaki describes the life of Lu Yixin, a Japanese war orphan left in China, who grew up as a son of the Earth, being tossed about by fate, and it is also a novel that tries to shed a light on Chinese contemporary history, such the Great Cultural Revolution. On the other hand, *Auntie Duohe(Tazuru)* by Yan Geling is a novel that describes the issue of Japanese war orphans left in China not as a social problem, but as the destiny of an individual, and it describes a symbiotic story crossing the race barrier in an enclosed space. In consideration of these differences, the things that were not visible become visible.

**Keywords** Japanese children left behind in China at the end of World War(残留孤児), Social party novel(社会派小説), Toyoko Yamasaki(山崎豊子), Auntie(小姨), Symbiosis(共生)

## 1 はじめに

山崎豊子の『大地の子』は、中国残留孤児・陸一心の波乱万丈の半生を描く長編小説である。1987年5月号から1991年4月号まで『月刊 文藝春秋』に連載。1991年に文藝春秋で単行本全3巻が刊行、1994年に文春文庫全4巻で再刊された。NHKの放送70周年記念番組として日中の共同制作によりドラマ化され、1995年11月11日から12月23日まで放送された。視聴率の高い人気ドラマであった。一方、中国では、2008年3月に同じ題材を扱う一篇の長編小説が『人民文学』に挙げて掲載された。戦後の混乱の中で中国に取り残された竹内多鶴の半生を描く巖歌苓の『小姨多鶴』である。同年作家出版社で単行本が刊行され、『当代』長編小説最優秀賞など数々の文学賞にも選ばれた。2009年に連続テレビドラマとなり、各地の放送局で放映される人気を博した。二つの作品は、女性作家による中国残留孤児問題を題材とし、ドラマ化されて高い人気を得たという点で共通する。

中国残留孤児問題はいうまでもなく戦争の後遺症である。しかも日本と中国という二つの国は当事国である。1981年に始まった残留孤児の肉親探しは日本のみでなく中国でも大きな話題となった。日中の歴史に残るこの問題は両国で如何に受け止められているか、ということを知るには、以上の二つの作品は絶好の材料となるのである。そもそも二人の作家がこの問題を作品化し残留孤児を描くのは関心をもつからであり、作品化の方法の差異や描かれた残留孤児像にそれぞれの立場や認識が反映されているはずである。そこで、本稿では、共通点の多い二つの作品を主人公の残留孤児の表象を中心に比較検討し、残留孤児問題をめぐって日中の女性作家が捉えた戦争と人間、民族の問題を考えたい。そのために、まず二人の作家と作品の成立をめぐる一連の事実を明らかにし、そのうえ、作品分析による内容与方法の異同の検討を行う。テレビドラマは考察の対象としない。

## 2 二つの作品の成立について

まず、作品の成立に目を向けたい。周知のように、記者出身の山崎豊子は『白い巨塔』や『華麗なる一族』などの社会派小説で知られている。その後に執筆された『不毛地帯』と『二つの祖国』も社会問題を扱った小説であり、しかも主人公は全員男性である。これらの作品の成立において一つ共通するところがあり、それはみな作者が綿密な資料調査と精力的な取材活動をした上で完成させた作品である。『大地の子』もこうした執筆スタイルによる作品である。作品の時代背景が1966年に始まった文化大革命の前後であるが、物語の始まりは敗戦直後の1945年秋に遡る。敗戦時の混乱の中、二人の日本人の子供が中国に取り残された。7歳の陸一心とその妹、3歳の張玉花(本名は松本勝男、あつこ)である。陸一心は日本人ゆえのさまざまな苦難を中国人の養父や後に妻となる女性などの深い愛情に助けられて乗り越え、中央官庁のエリートとして中日合作の国家プロジェクトである宝華

製鉄の建設に携わり、その工場建設に協力する日本の製鉄会社の現地事務所の所長を務める実父との再会を果たす。一方、農婦になった張玉花は貧しい中で病死する。対照的な人生の道を歩んだ二人を描くのは残留孤児の表象の重層化を図るためであろう。

下巻(1991年版単行本、以下同)の末尾に付された「あとがき」や「参考文献」を読めば、ある程度作品成立の経緯を知ることができるが、より詳しいことを把握するには小説の後日談である『「大地の子」と私』がある。それによれば、1984年6月、中国社会科学院外国文学研究所の招待で中国を訪問した時、北京人民文学出版社の方から「宋慶齡について書いてくれませんか?」と打診された。宋慶齡とは孫文の妻で有名な宋家三姉妹の長女。だが、山崎は「私にはとても中国人は書けません」と辞退する。すると、「あなたは『二つの祖国』でアメリカを書いたじゃないですか? アメリカを書けて、中国は書けないんですか?」といわれ、そこで「二つの祖国」で日系アメリカ人を書いたことを思い出し、「中国には戦争孤児がいた。これなら書けるかもしれないとひらめいた」<sup>1</sup>という。結局このやりとりは執筆のきっかけとなるのである。その後、彼女は北京、瀋陽、長春、哈爾濱、延安、敦煌、新疆へと精力的な取材活動を始めた。現地での取材の壁が高く取材が難航した時、11月に北京で初めて中国共産党中央委員会の胡耀邦総書記との会見が実現した。会見時のことを「あとがき」で次のように記している。

取材の経緯をお話すると「それがわが国の官僚主義の欠点だ、必ず改めさせるから十年がかりでも書くべきだ。中国を美しく書かなくて結構、中国の欠点も暗い影を書いてよらしい、それが真実であるならば、真実の中日友好になる」と励まされ、取材協力の約束をされた。

その後、取材の環境が大幅改善されたという。三年間にわたる現地取材で陸一心のモデルとなる人を含む数多くの残留孤児に会ってきた。このあたりのことは王晶、王亭亭「山崎豊子が描いた中国東北部の残留孤児——『大地の子』を中心に——」<sup>2</sup>に詳しい。ここで一つ気になるのは、胡耀邦総書記との会見が作品の世界にいかにか投影されているかということである。「あとがき」に「一九八九年四月、胡耀邦氏の急逝後は、取材の門は再び固く閉ざされてしまった」とあるように、作品の成立において三回も会見してくれた胡耀邦の存在が大きかった。天安門事件のきっかけとなった彼の失脚、急死は小説に登場している鄧小平と無関係ではあるまい。というのは、胡耀邦が作中でも現実でも鄧小平の信頼を得ていたが、総書記の座を追われたのも鄧小平の意志であり、総書記交代劇で受けたダメージが結局体調悪化につながったからである。作中では、鄧平化(鄧小平)は夏国峰(華国峰)との権力闘争に計略をめぐらして勝った政治家として描かれており、宝華製鉄を政争の武器として巧みに利用したのは勝因の一つとされている。これは中国

1 山崎豊子『「大地の子」と私』(文芸春秋社、1999)、p.15.

2 王晶・王亭亭「山崎豊子笔下的中国东北日本遗孤——以《大地之子》为中心」(『日本研究』1期、2015)、p.86.

現代史の核心に迫る話である。あくまで小説の世界だが、語り手が鄧平化の態度、風貌を表すのに「傲岸不遜」という言葉を用いているし、登場人物の一人、夏国峰の側近たる汪西興(汪東興)が鄧のことを「鄧矮子(鄧チビ)呼ばわりし、「狡猾極まりない奴」とするところはかなりリアルのである。こうした描かれ方からしても山崎は鄧小平に余りいい印象をもっていないことがうかがわれるが、前に引用した胡耀邦の印象を語る「あとがき」の文章と合わせて読めばなおさらである。要するに、胡耀邦との会見を含む現地での取材中の体験は残留孤児問題を中国現代史の中で描くという構想につながるのとみてよい。

この点において、『小姨多鶴』は『大地の子』と対照的な作品である。前者の物語は主として庶民の世界で進行し、文化大革命などは背景にあるものにすぎない。一つの家庭という閉ざされた空間が主な活動の舞台となるが、その家庭内の人間関係は現実離れするほど複雑なものである。その複雑さはまず小説の題名に現れている。「小姨」とは、夫から見た「妻の妹」、子供から見た「叔母さん」のこと。1945年秋、引き揚げ途中集団自決に及んだ開拓団から逃げ出した16歳の竹内多鶴は、中国人の家に売られてその家の息子・張儉の子を産む。張儉には朱小環という妻がいたが、妊娠7カ月の時に日本兵に追われて流産し、子供を産めなくなったために、張儉の両親が多鶴を買ったのである。子供を産む道具として買われた彼女は、夫・張儉とその妻・小環とともに、小環の妹としての暮らしが始まる。鞍山の製鉄工場で働いている張儉は多鶴の秘密を隠すために、一家を連れて一千キロも離れた馬鞍山の製鉄工場に転勤する。

言葉も通じず、抗うこともできず、自殺を試みたこともある多鶴だったが、娘、続いて双子の息子を産み、徐々に生活を受け入れてゆく。張儉は小環を愛していたが、次第に多鶴をも愛している自分に気づき、二人はついに愛し合う仲となる。小環もまた多鶴の危機を何度となく救う。三人はこうして生活しているうちに文化大革命を迎えてくる。多鶴の正体と一家の奇妙な関係がばれるが、前に起こったある死亡事件のため、張儉は殺人容疑で逮捕され、無期懲役の刑に服することとなる。自分たちの本当の母が多鶴だと気づいた子供達は、学校や職場で差別されて苦悩する。働きものの多鶴はどんなに辛くとも家族のために尽くし続け、苦しい生活の中でも何とか暮らしながら、ついに田中角栄が訪中し、日本との国交が回復される。多鶴は日本に帰り、掃除婦として働くが、5年後に中国に戻って来て、出獄した張儉を日本に連れて帰って、医者に診てもらったが、骨髄の癌であったという間に亡くなった。長男、長女は日本へ行ったが、次男と小環は中国で暮らす。多鶴からの手紙で彼らの日本での生活ぶりが伝えられている。

敲歌荅は1958年上海市に生まれ、安徽省の合肥市、馬鞍山市で育つ。軍人生活の経歴がある。1986年に初めて小説を発表。1989年アメリカに留学し、コロンビア大学で英文学を学ぶ。現在、主に中国語で創作活動をしているが英語で小説を書くこともある。軍隊など勤務した経歴の実体験、渡米後の移民生活の実体験を踏まえた作品が多く、新移民文学の作家として知られている。代表作に長編小説『九人目の未亡人』、『扶桑』、『雌性

の草地』、中編小説『白蛇』、『アダムでもあればイブでもある』、短編小説『少女小魚』、『天浴』などがあり、いずれも女性を主人公とする作品である。

『小姨多鶴』の成立について、嚴歌苓は「友達のクラスに双子の男子学生がいる。後に二人の母親が日本人であることが発覚した。彼女は引き揚げ途中で肉親を失い、馬賊に掠奪された後中国人の家に売られた。中国人と何十年間暮らしたが、ついに日本に帰った。大分前からこれを書こうとして、そのために三回も日本に渡り、何人かの日本人女性と話した。日本から帰ってきて二ヶ月余りをかけて作品を書き上げた」<sup>3</sup>と語っている。要するに、二十年前に友人から聞いた話が執筆のきっかけとなるのである。そして、東北地方の鞍山でなく長江沿いの町馬鞍山を小説の舞台にするのは彼女が馬鞍山で育ったからである。文化大革命中父が下放された製鉄工場の宿舍で少女時代を過ごしたが、その製鉄工場は作中では張儉の職場、その宿舍は一家の暮らしの場となっている。これらは、彼女にとってすべて熟知している空間である。こうして、自分の生活体験を踏まえる執筆スタイルは作品を短期間に書き上げることにつながったのであろう。

『大地の子』と『小姨多鶴』を比較で考察する先行論文は管見の知る限りでは、朱琳氏の「同じ題材、違う表現——山崎豊子『大地の子』と嚴歌苓『小姨多鶴』の比較研究」<sup>4</sup>との一本しかない。僅か一頁の文章に箇条書きで両作を比較した結果が記されている。(1)では主として山崎豊子が残留孤児の代わりに戦争孤児という言葉を使っていることを紹介する。(2)では両作の筋の異同を表にまとめて対比する。主な共通点は陸一心も多鶴も売られていたこと。主な相違点は、多鶴が日本に帰国永住し、陸一心が中国に残ること。(3)では二人の作家の民族的立場が違うことを指摘する。主な共通点と相違点は確かに朱琳が指摘した通りである。但し、残留孤児になった経緯はまるで違う。陸一心兄妹はソ連軍による殺戮を偶然生き残って残留孤児になったのに対して、多鶴は集団自決の場を自分の意志で脱出して中国に取り残されたのである。こうして、主人公の運命の歯車の狂いが違う状況のもとに始まったのである。要するに、戦争の悲惨さについて、二人の作家の着目点が異なるのである。結末における二人の行方の違いも意味深である。多鶴が日本に帰国永住したのは残留孤児たちの帰国後の現状を小環への手紙で伝えるためでもある。以上の二つの相違点は二人の作家の残留孤児問題への認識の差を露呈させるのである。

まとめていうと、残留孤児問題の作品化にあたって、山崎豊子は綿密な資料調査と精力的な取材活動した上で作品を書き上げるのに対して、嚴歌苓は主として自分の経歴や体験を活かして作品を書き上げるのである。主人公の残留孤児になった経緯や最後の行方の違いを含めてこうした違いは、当然のことながら残留孤児の表象につながっていく。

3 無署名「日本开拓団の真相和《小姨多鶴》背后的故事」(『大众网·齐鲁晚报』2014.8.31), p.6.

4 朱琳「相同的题材不同的表达——山崎丰子《大地之子》与严歌苓《小姨多鹤》的比较研究——」(『中国科技经济新闻数据库 教育』2期, 2017), p.62.

### 3 『大地の子』の世界

『大地の子』は上、中、下の3部構成となる壮大な物語である。上巻を読んでいるうちに、時々主人公陸一心の脳裏をよぎる「日本人なるが故」という言葉は印象に残る。「日本の戦争孤児なるが故」を含めてこの言葉は上巻に五回も出ている。7歳から中国で中国人として育ちながらも常に日本人であることを意識せざるを得ないという葛藤は、プロットの核心に据えられているといってもよい。残留孤児の宿命として子供の頃から陸一心にのしかかった「日本人なるが故」は、彼と彼の生きる社会との関係を端的に示すものとして、彼の人生にさまざまな試練と苦難をもたらしてきたのである。

日本の戦争孤児なるが故に、幼い頃からこの二十数年間、自分の身体に捺印のように捺された蔑称——、「小日本鬼子」とは何かを、心の底から問いかけた。「一章 小日本鬼子」

文化大革命中のある日、技師として働いている北京鋼鉄会社の工場敷地内で開かれた批判大会の会場で、陸一心がいきなり「日本侵略主義の種であることを隠した罪」などで連行された。やがて刑期不明のまま労働改造所に送られることになり、労働改造所に向かう列車の中で以上のように考えたのである。彼にとって、当時悪夢の始まりを意味する「日本人なるが故」は彼自身というより中国社会の問題である。なお、出発時、駅でその日一緒に連行された上司らが見かけなかったため、彼は「やはり日本人の血をひく自分だけが労働改造所送りになったようだった」と思う。そして、日本人という出自による苦い経験は学生時代に遡る。

やがて丹青は、  
「あなたが日本人だと解っていたら、愛など抱かなかった、許せないわ。」  
そう云い放つと、くると背を向け、もと来た道へ向かって、突堤を去って行った。  
はじめて育み、結ばれかけた愛でありながら、日本人になるが故に、失われてしまった。「七章 流刑」

大連工業大学在学中、高級幹部の娘である同級生の趙丹青と恋に落ち、結婚する話も出たので、卒業する直前に自分が日本人であることを彼女に告白したら以上のように、それは受け入れられなかった。初恋の破綻も日本人という出自が原因だった。そして、子供の頃から彼を散々苦しめてきた「日本」は「日本」を呼ぶことになる。労働改造所で羊を放牧中の出来事だが、「七歳の時から日本人なるが故に、小日本鬼子と苛めぬかれ、青春時代の初恋も破れ、今、冤罪で労働改造所の囚人となっている自分の前に、突如として“日本”が現れたのだった」(「八章 さくらさくら」)。ここの「日本」は歌声の中の日本であり、日本の歌を唄ったのは同じ労働改造所の囚人である愛国華僑の黄書海である。放

牧中草原で偶然陸一心に出会ったのだ。この出会いをきっかけに、陸一心は日本から帰国した彼に日本語を教わることになる。このことは彼にとって、後に一つの転機となる。放牧中のことで、次のような用例も見られる。

羊飼いを一人出す時も、職人肌のボスの裁量では決らず、政治犯二十名、刑事犯八名の中から、一心に押しつけられたのは、日本人なるが故だった。日本人なら脱走しても、養父母のもと以外に係累がなく、逮捕しやすいというのが、結論のようだった。「八章 さくら さくら」

これは、むしろ「日本人なるが故」という言葉への作者のこだわりを端的に示す用例となる。このやや強引的な用例に示されるように、陸一心にとって、少年時代から背負った出自の宿命は運命そのものであり、彼の人生はこの運命との闘いだだったともいえる。極端な言い方をすれば、運命に翻弄されながら成長していく陸一心を描くには「日本人なるが故」が欠かせないものである。日本の起こした戦争があった以上、社会から押しつけられた「日本人なるが故」が悪夢の始まりを意味するものであるという論理は読者、少なくとも日本の読者にとって分かりやすい、また容易に納得できるものだからである。それと裏腹に、陸一心は自分が養父母の子として育てられた中国人であるという強い信念を持っている。

一心は、日本の総理大臣一行の顔を凝視した。幼い時から、小日本鬼子と苛めぬかれ、文化大革命が始まると、いち早く、日本特務の容疑をきせられ、日本人なるが故に、常に蔑視の対象とされてきたが、これから同じ中国人として平等に扱われるのだろうか。「十四章 証し」

陸一心が中日国交回復を報じている『人民日報』を読んでいる時の心境である。国交回復にあたって彼が秘かに願っているのは、皮肉にも日本人ではなく「中国人として平等に扱われる」ことである。もちろん、その裏に国交回復により日本、日本人のイメージが改善されるという期待も込められているが、現実はその期待通りに動いたのである。やがて文化大革命が終焉し、改革開放の時代になると、日中間の貿易活動が一層活発になるのである。こうした変化を背景に、重工業部へ転属された陸一心は宝華製鉄の建設に携わることとなり、「日本人なるが故」という言葉は中巻、下巻から消えるのである。

とはいうものの、「日本人なるが故」は別の形で彼の人生に影を落としている。趙丹青の夫である馮長幸によって密告されたことはその一例であろう。密告の内容は訪日中の行動が疑わしいとか、情報を日本の会社に提供したとかいう、彼を陥れるために捏造されたものばかりであるが、これで上司に呼び出されたので、「一心は、自分の出自が、絶えず、自分の行動に関り、中日合作の国家的プロジェクトである宝華製鉄の建設に携わっていることは、微妙で難しい立場にあることを思い知った」のである。だか

ら、彼は日本の会社を相手とする交渉に、余計に厳しい態度で臨み、一步も譲らない姿勢を示すのだ。こうしたスタンスも「日本人なるが故」だったのである。逆の意味でいえば、「微妙で難しい立場」とはこういうものだったのである。

もちろん、「日本人なるが故」にすべて悪いことになるとは限らない。例えば、日本人だから日本語を学んだことは重工業部への転属につながるのだ。陸一心にとって人生の転換点となる出来事だが、これは日中国交正常化という時代の変化に伴うものである。確かに時代の変化に伴って周りの人々の見方も変わる。下巻「三章 密告」に陸一心と趙丹青の関係を疑った馮長幸と趙丹青の会話がある。馮が「やはり、僕の勘が当たっているらしいな、あいつの出自は日本人だぞ」と言ったのに対して、丹青は陸一心が初恋の相手だったこと、日本人だから結婚できなかったことを認めたくなくて、「(前略)陸一心は、あなたのように私の爸爸的地位を利用して、のし上がって行くような下種な人柄じゃないわ、血は小日本だけど、宝華製鉄にけるあの寝食を忘れるほどの打ち込みようは、中国人以外の何者でもないわ、四つの現代化に身を挺して、中国人民を富み栄えさせたいと願っているりっぱな中国人だわ」と言い切る。かつての恋人だった趙丹青の眼中の陸一心はいかにも好人物である。問題となるのが含みのある言葉として「血は小日本だけど」という一言である。要するに、山崎からみれば、少なくともこの点だけは依然として受け入れられないものである。

こうしてみると、子供のころから陸一心に付きまとい、彼を幾度となく苦境に陥れた「日本人なるが故」をどう乗り越えるかは作者にとってのドラマであるといえる。ただ、このドラマは当時の中国の現実をリアルに再現するものというより、残留孤児問題を作品化するために構成されたものといったほうがよかろう。もちろん、文化大革命批判など作者自身の中国認識もその中に混じっている。では、同時代の中国人は戦後の日本と日本人をどう見ていたかという、そのイメージは複雑なものである。悪感情を抱いていたことは否めないが、今日のように表に強く出ていたわけではない。というのは、対日感情は過ぎ去った戦争の影響が大きい、1950~70年代の中国においては朝鮮戦争、台湾問題、ベトナム戦争などがあって、愛国主義教育は反米を中心に展開してきたからである。従って、日本人残留孤児に対して、小説に描かれているほど周囲が敵視したことは考えられにくい。

その理由を別の角度から考えると、中国の残留孤児研究者王歡が指摘するように、「大多数の“残留孤児”は日本人であることを知らなかった」<sup>5</sup>からである。養父母は中国人として届け出たケースが多かった。これは残留孤児の肉親捜しが難航した原因の一つでもある。陸一心のように子供の頃から自らの出自を知っており、かつ「档案(身上書)」に日本人、と記されている残留孤児はあくまで少数派である。その上、狭き門だった工業大学を出て中央官庁のエリートとまでなった残留孤児は極めて珍しい存在である。このように、作中の現実と実際の現実との間に落差があることは明らかである。それは山崎

5 王歡「日本“残留孤児”：没有终点的“旅行”」（『世界知识』12期，2007），p.59.



豊子が自分の中の残留孤児像を描き切るための工夫であるとみていい。

「日本人なるが故」の用例を精査すると、概ね陸一心が孤独な状態に追い込まれたときに出ている。落ち込んだ彼をいつも精神的に支えているのは養父母・陸徳志夫婦や後に妻となる江月梅の深い愛情、友人・袁立本夫婦らの厚い友情である。具体的には、彼の冤罪を晴らすために老躯をおして奔走する陸徳志の姿などを見れば十分である。こうして、意識的にクローズアップされた「日本人なるが故」とこれをめぐって展開する人間ドラマは、運命に翻弄されながら成長していく陸一心の物語を描く方法であるといえる。小説の圧巻で、中国人の養父と日本人の実父との間で葛藤する陸一心は悩んだ末、「大地の子」として中国で生きてゆくことを決意するのである。大久保明男氏はこうした結末は大多数の残留孤児の現実と乖離し、「中国の国家や民族に対する過剰な賛美にならないのか」<sup>6</sup>と批判する。確かに自分の意志で中国に残ることを選択した残留孤児はごく少数である。が、そこに当時の中国の国内情勢や日中関係への配慮があったように思われる。

ここでは、特筆したいのは従来言及されなかった二本の中国映画との関係である。それぞれ1981年11月、82年4月に公開された『天雲山伝奇』と『牧馬人』である。いずれも謝晋監督による反右派闘争や文化大革命を反省、批判するヒット作であるが、政治運動でやられ労働改造に送られた主人公の半生を描く知識人受難の物語、運命の反転する物語として陸一心の物語と重なる。山崎豊子がこの二つの映画を現地取材中で知り、ストーリーの構成にヒントを受けたことは十分考えられる。のみならず、後者の末尾で、若い妻や地元の人々の愛情に支えられて冤罪が晴れる日を迎えた主人公は、海外に行って資産家の父親の財産を引き継ぐ権利を放棄して中国で生きてゆくことにする。文革の混乱期から抜け出した当時の中国では、こうした結末は祖国を愛する知識人の選択として讃えられ、共感されたのである。残留孤児問題の作品化にあたって、山崎豊子は『牧馬人』の結末を意識しなかったのだろうか。その類似性から、少なくとも『大地の子』の結末は中国における時代の流れに沿う形になっているといえよう。

#### 4 『小姨多鶴』の世界

『人民文学』に一挙に掲載された『小姨多鶴』はすぐ読者の間に大きな反響を呼び起こした。その後数多くの評論が発表されたが、女性、母性という観点から論じられているものが多い。代表的な評論に「小説は読者に生粋の日本人女性・多鶴と生粋の中国人女性・小環という人物像を呈示した。彼女らは敵歌苓が『扶桑』や『九人目の末亡人』で描いた自我を抑えて耐え忍ぶ、「不変を以て万变に應ず」を心得ている「東洋の女性」と一脈相通ずるところがある」<sup>7</sup>とある。確かに、多鶴と小環をヒロインとする物語として読んでいく

6 大久保明男 「第十章『中国残留孤児』のイメージと表象」(蘭信三編『中国残留日本人という経験』, 東京: 勉誠出版, 2009), p.359.

と、敵歌苓が描きたいのは窮地に追い詰められた女性の強さ、美しさであり、敗戦、残留、文化大革命などは極限状態を作り出すための装置にすぎないという読み方も許されよう。しかし、執筆のきっかけや小説の題名などからすれば、小説が残留孤児である多鶴を中心に構想されたことは明らかである。作中には残留孤児という言葉が出ていなく、代わりに日本人残留女性という言葉が出ているが、引き揚げ途中で肉親を失い、天涯孤独の身となった16歳の多鶴に残留孤児のほうが相応しいと思う。なお、陸一心は父が活着しているため、彼女は正真正銘の残留孤児となる。

残留孤児として多鶴にも「日本人なるが故」の問題がある。ただ、「日本人なるが故」に差別にさらされ、苦難を受けた陸一心の場合と裏腹に、彼女は「日本人なるが故」に常に秘められる、というより守られる存在となるのである。彼女が日本人であることと三人の奇妙な関係は一家の秘密であり、一家が安平鎮から鞍山へ、鞍山から馬鞍山へと転々としたのも、多鶴が長い間口のきけない人を装ったのも、張儉が白玉良を殺した犯人として刑に服したのもこの秘密を隠すためである。一家を出入りする彭瑞祥、白玉良という二人の配役の存在もこの秘密に関わっている。この意味では、「日本人なるが故」はプロットの核心にあるものといえよう。この点では、期せずして『大地の子』と重なる。但し、残留孤児問題を社会問題とする『大地の子』と違って、『小姨多鶴』では「日本人なるが故」は人と人、即ち家庭内の問題でもあり、三人の間にこれをめぐってさまざまな葛藤が生じるが、それを乗り越えて生きてゆくのは作者にとってのドラマである。ここでは、主として家庭内における「日本人なるが故」を検証してみよう。

16歳で残留孤児となった多鶴は陸一心や張玉花と違って、日本人であることがあくまで自意識であり、彼女の中で中国語と日本語が常に拮抗している。中国語を帰国するまで完全にマスターしなかったのは、特殊な生活環境のためであると同時に、日本語へのこだわりも一因となる。家庭内の「日本人なるが故」は、張儉においては、自らの戦争体験に基づく日本人への反感、抵抗意識に、多鶴においては、自分の民族的アイデンティティを保つことにつながるのである。要するに、敵歌苓からみれば、「日本人なるが故」は残留孤児自身の抱えている問題でもある。そのため、多鶴にとって、子供を産むことと生まれた子供は特別な意味をもつのである。

祖国にも代浪村があり、そこに竹内家先祖代々の墓がある。でも、祖国の代浪村が遠すぎる。そもそも長女、長男、次男の身体からその代浪村を取り戻すことができ、彼らの目から祖国に埋葬されている代浪村の先祖たちの喜怒哀楽が見られる。(中略)彼女は太郎、次郎の髪の毛を撫でるたびに——子細に見れば、その髪の毛が眉につながっている——彼女の父、兄、弟を思い出す。彼らは子供の小さな肉体に宿って生き返って彼女の体を暖め、頼りになるのである。(第六章)

7 魏冬峰「北大刊評・根気強く耐え忍ぶ東洋の女性——敵歌苓の『小姨多鶴』を評す——」(『西湖』10月号, 2008), p.108.

要するに、彼女は子供を自分と亡くなった肉親を結ぶ絆とし、これによって家族、祖国との繋がりを保っていかようとするのである。子供たちに日本語を秘かに教えたのもそのためだった。反面、一時的に子供の存在だけが彼女の生きがいであったのである。ある日、張儉に公園に連れられていき、置き去りにされた。道に迷って遠地に行った彼女は、子供に会いたいという必死な思いで、散々苦勞した末やっと家に戻ってきた。張儉への報復に子供を連れて心中しようとしたが、「長女が頭を上げ、齒の欠けた甘い笑顔を見せた瞬間、多鶴の中に潜む代浪村人の死への情熱が完全に冷めた」のだ。子供を産む道具として買われたという屈辱は、却って子供を産むことによって乗り越えられるのである。多鶴の母性本能による自己救済にほかならないが、女性作家の本領が発揮されたところである。

一方、子供は多鶴と張儉・小環夫婦を繋げる存在でもある。子供の父親である張儉との関係について、最初は「彼女はこの男が好きではない。この男も彼女が好きではない。彼女がこの男に求めるのは愛情ではなく生存である」とある。その理由は、彼女にとって、「この男」が「占領軍」だからであり、彼にとって、「彼女」が「日本人」だからである。二人のこうした関係は中国人の「常識」をはみ出していない。問題は、「もしあの戦争と日本人が長い間中国で蛮行をしたことはなかったら、彼は多鶴を娶る」とあるように、それをいかに乗り越えるかということである。そこで、男と女の仲が鍵となり、やがて二人の間に恋が芽生えるのである。愛する人の前で、多鶴のアイデンティティーも、張儉の日本人への反感も崩れ去るが、ここでは、注目したいのは恋の描かれかたである。

第三章に「一本の幹が曲がっている槐の木、一本の案山子、一棟の倒れかけた草小屋、これらはすべて地平線上の一つの座標となっている。小環には地平線や座標とは何か分からない。ただ、彼女は一九四八年の秋の中にぼんやりと立っているだけである」という一幅の絵のような場面がある。文法の三人称を使った場合、語り手は全知全能の存在になり、物語の中で事件が生起する空間とは別の、独立した空間に身を置いている。こうして、自分と「小環」との違いを強調するところは当たり前といえようであるが、語り手が登場人物を上から見下ろす構図になっているともいえる。これは、視覚化にこだわる語りの構造の特徴の一つである。「『小姨多鶴』は心理描写を得意とする」<sup>8</sup>という指摘があるが、実は作中に心理描写より見ること、すなわち視覚描写が目立っている。張儉が多鶴に恋心を抱いた自分に気づいた瞬間の描写はそうである。「沈黙はすぐ二人の心を疲れさせた。彼は顔を斜めにして彼女の黒い髪の毛から露出した眉、目、鼻柱、鼻の先、唇を見て——どうして三十何歳になって初めて彼女を落ち着いて見、これまでと違う彼女を見つけたのか」(第六章)とあるように、対象を見つめることによって自分の内心の変化に気づいたのだ。

このように、視覚描写が多いのは語りの構造に関わっているが、登場人物の言語能力の不足のためでもある。家庭外では、正体がばれないように多鶴は長い間口がきけな

8 楊曉文「敵歌峇の小説『小姨多鶴』を論ずる」(『華人文學』5月号, 2012), p.31.

い人を装っており、家庭内では、彼女のアイデンティティーは中国語の習得を妨げることになるのである。言語障害は残留孤児が直面する現実的な問題として、ストーリーを構成する上でも重要なファクターとなるが、作中では、特徴のある恋愛描写につながる。以下は張儉が自分の気持ちの変化を確認する場面である。

これまで日本のものなら彼はすべて憎悪を感じる。多鶴の身体に現れたごく僅かな日本人らしい態度や仕草でも彼と彼女の距離を広げるのである。しかし、多鶴の身の上を知ってから、多鶴のふかふかしている項の髪の毛の生え際や正座姿は可愛らしいものになってきた。この二年間、彼女との愛に耽け、彼女と色目遣いをしているうちに、自分が愛しているのは日本人の女性だと思った瞬間は時々あった。(中略) 彼女の身の上は彼を変心させ、彼は小環に二心を抱くようになった。(第六章)

これは女性作家が描いた製鉄工場で働く男の目線である。見る目の変化から始まり、多鶴及び日本への見方を変え、彼女を愛するようになったのは彼女の「身の上」を知ったからである。ここの「身の上」とは彼女が集団自決で肉親を失い、引き揚げ途中で極めて悲惨な体験をした経歴を指す。そこで、彼女への愛情が同情から来たものであると言われても仕方がない。かなり「甘い」<sup>9</sup>理由で彼女と彼女の背負っている日本を受け入れたのだが、二人は愛し合う仲となったのは事実だし、多鶴の愛はもっと無私なものである。

彼女は張儉との恋に落ちる前に、中国人の社会に溶け込み、中国人に自分を同類として迎えてもらうことなんて考えたこともない。孤独を感じたことすらなかった。彼女には子供がいるからだ。(中略) 彼女はもう元に戻れない。彼女が秘かに築いた代浪村は崩れた。彼女は自ら崩したのだ。彼女はこの張儉の生活する国が自分を受け入れ、自分をそのまま中に取り込んでほしいからだ。彼女は張儉が好きになったから彼の祖国をそのまま受け入れたのである。(第七章)

自分のアイデンティティーを捨てるまで彼を愛した多鶴の愛と比べて、張儉の愛は多少理性的であるが、相当深みのあるものである。二人の熱愛は映画館での情事がばれたのをきっかけに一旦冷めたが、彼の彼女への愛が消えたわけではない。多鶴の美貌に垂涎した白玉良の死は何よりそれを物語っている。多鶴の正体を知り彼女を脅迫した彼は、やがて張儉が工場内で起こした事故で死ぬ。本当に事故なのか真相が不明のままだが、それで、彼女の身に迫る危険が解かれ、張儉が投獄されたことは事実である。一方、多鶴は出獄後の張儉を日本に連れていき病院に通わせたのである。こうして、二人が心の中で愛し合い続けたことは中国人と日本人が民族や戦争の壁を乗り越えて共生していけることを裏付けることになるが、共生はすでに平凡な日々の中で始まっている。

家庭内の「日本人なるが故」を別の角度から見よう。第八章に「小環はもし鏡のような

<sup>9</sup> 注6に同じ。

滑らかな床、アイロンがけされたよい香りをする衣類、小エビや小魚やセミの佃煮、大福餅などがなかったら、張家の人たちが生きていけるかと思った。(中略)十数年来、多鶴は代浪村の家を続々とここに移した」とある。「ここ」は自分の生活する「張家」を指す。

綺麗好きな多鶴はいつもコンクリートの床をきれいに磨き、洗濯物にのりをつけアイロンをかけるのである。こうした「日本人なるが故」の生活習慣には小環も張俚も強い抵抗感があったが、時間が過ぎるにつれて、二人は徐々にそれを受け入れ自分の生活美学とするのである。そのため、小環は床を汚した次男の愛犬を二階から落としたことさえある。日常生活の中のさまざまな葛藤を含めて、そのあたりに女性作家の独特な生活感覚が滲み出ている。

一方では、主婦として「湊合」(我慢する、間に合わせる)という言葉は小環の口癖であり、生活哲学でもあるが、多鶴も知らずのうちに何でも我慢する、代用品で間に合わせる生活に慣れてきたのだ。彼女は「湊合しているうちに、どうしようもない状況の中でいささか満足感を味わい、こっそり楽しむことができたと自分でも驚いた」のである。文化大革命中の出来事だが、多鶴は連日頭から離れなかった死への思いがある日突然消えたことに気づく。「小環は相変わらず毎日嘆きながら『湊合する』、笑いながら『湊合する』、不平を零しながら『湊合する』と、日々はいい加減に過ごしてきた。彼女も彼女と一緒にいい加減に過ごしてきた」とあるように、「湊合」で過ごした日々はその気持ちを少しずつ消したらしい。そもそも「何事も完璧を求める真面目な人間」だった多鶴は、やがて「『湊合』は少しもつらいことではない。慣れればとても気持ちのいいことだ」と感じるようになった。彼女が中国人になった瞬間である。こうして、日々の生活の中における「日本人がなる故」は乗り越えられるのである。

作中に違和感のある描写や設定がないわけではない。中で一番気にするのは多鶴の帰国のきっかけである。集団自決の混乱の中で多鶴は久美という女の子を助けた。その後日本に引き揚げ、18歳で看護婦となった彼女は、たまたま田中首相訪中のことを知り、自分の経歴を手紙に書き首相に送ったら随行の看護婦に選ばれた。この機会を利用して中国側に渡した手紙をきっかけに多鶴が帰国の途につくのだ。日本では、こうした都合のいい話は考えられないというか、コネをつけるという発想は中国的である。でも、敵歌苓は自分の弱点を知らないわけでもない。例えば、多鶴の帰国後の生活をもっぱら彼女からの手紙で伝えるのは日本での生活に不案内なためであろう。そして、その手紙の中に「だから、中国から帰ってきた人は日本では最も貧しく、最も差別を受けている人になる」とあるのに注目したい。これは敵歌苓の最も言いたいことの一つだろう。

## 5 おわりに

以上見てきたように、山崎豊子の『大地の子』は残留孤児問題を社会問題として描く社

会派小説である。作品化にあたって、山崎豊子は残留孤児の宿命ともいえる「日本人になる故」という葛藤をクローズアップして主人公と社会の関係を織り出すという方法で物語を構成するのである。文化大革命や改革開放期は背景にありながら観察、表現の対象として物語の中に織り込まれている。要するに、彼女は主人公の波乱万丈の半生とともに彼の生きる時代にも光を当てようとするのである。こうした制作意識は当然のことながら小説の結末につながっていく。文化大革命が終わり、改革開放の時代になると、残留孤児にとって、「日本人なるが故」は悪夢の始まりを意味するものから日本への帰国のための通行証へと変わるのである。日本に帰国永住するのは時代の流れとなっているが、陸一心にとって、これで彼を散々苦しめた出自の問題が解決されたわけでない。あえて時代の流れに逆らい、中国で生きてゆくことを決意するのは、その裏に養父母への恩返しの気持ちや家族と過ごした中国への愛着などがあると同時に、「日本人なるが故」という宿命を乗り越えるためでもある。こうした結末は小説全体の写実性から少しはずれるが、運命に翻弄されながら成長し、中国で生きてゆこうとする陸一心は山崎豊子が描いた理想的な残留孤児像であり、そこに彼女の戦争への反省と日中友好への願いが込められているといえる。要するに、戦争を起こした国の作家として、山崎豊子からみれば、精神的に「大地の子」にならないと戦争の後遺症が乗り越えられないのである。

一方、敵歌苓の『小姨多鶴』は残留孤児問題を人と社会の関係というより人と人との関係を中心に描く作品である。この点で『大地の子』と異なり、作品化の方法も大分違う。伝統的な美德を持っている魅力的な女性として描かれている多鶴は、作者の個人的な体験と知識が生み出した現実的かつ象徴的な残留孤児像である。性格が彼女と正反対だが、忍耐力、包容力のある小環についても同じことがいえよう。女性、母性、移民という視点から読み進めると、二人は指摘があったように、『扶桑』などのヒロインと同様数奇な運命を辿りつつ根強く生きてゆく「東洋の女性」として描かれているといえる。しかし、一残留孤児の運命という視点から読み進めると、戦争から和解、共生へというテーマが浮上してくる。残留孤児として多鶴にも「日本人なるが故」の問題があるが、敵歌苓にとって、それは時代や社会の問題というより人と人との問題であり、人間の愛情、友情で乗り越えられるのである。敗戦の混乱の中に奇妙な関係で結ばれた三人はごたごたしながら互いに相手を受け入れ、愛していく人間ドラマを演じるのである。中国人と日本人が民族や戦争の壁を乗り越えて共生していけることはこれによって裏付けられることとなる。のみならず、ともに妻、母親としての葛藤をもつ多鶴と小環が、苦しい生活の中で互いに相手の生きかたや生活習慣から影響を受けながら文革という激動の時代を生き抜くところに、まさに国境を越えた人間愛があったといえる。これは敵歌苓が捉えた残留孤児の現実であり、戦争への認識である。平凡な日々の中の身にしみた人間ドラマに女性作家の独特な感性と生活感覚が滲み出ている。

但し、最後に、国境を越えた融和、共生は中国ではできるが日本ではできない、あるいはできる環境が整っていないという作者の認識は、孤立と差別に苦しむ帰国残留孤

児の現状を伝える多鶴の手紙に示されている。これは、二つの作品の大きな違いであるといえる。作品の中で、二人の作家はともに残留孤児問題を相手の国を観察する窓口とするのである。結末だけをみれば、山崎豊子の理性的な眼差しと比べて、嚴歌苓の感性的な眼差しにより厳しいものがある。作品化の方法を含めてそれぞれの残留孤児像が両国の作家の残留孤児問題への認識の差異を浮き彫りにするという点に本稿の意義を求められよう。最後に、二つの作品の成立期間に三十年近くの隔たりがあることも見逃せない。これが作品の成立にどう関わっていくかということを今後の課題としたいが、二つの作品の結末の違いに無関係ではないことは確かである。少なくとも、山崎豊子は嚴歌苓が後に見た帰国後の残留孤児の現実を予見できなかったといえる。

## 参考文献

- 大久保明男(2009)「第十章『中国残留孤児』のイメージと表象」蘭信三編『中国残留日本人という経験』。東京：勉誠出版。Akio, O.(2007) *Daijusho Chugokuzanliukoji no Yimeiji to Hyozou, Chugoku Zanliukojitai Keiken*. Tokyo: Benseishuban.
- 林雪星(1999)「山崎豊子の『大地の子』に見る中国の実像」『邁向廿一世紀的日本研究國際會議論文集』。pp.294-305. Lin, Xuexing(1999) *Yamassakitoyokono Daitinkonimiru Chugokuno Zituzou, Maixiang21 Shiji de Ribenyajiu Guoji Huiyi Runwenji*. 294-305.
- 石浜昌宏・田所竹彦・景慧・伊藤一彦(1998)「ドラマ『大地の子』を検証する」『宇都宮大学国際学部研究論集』6. pp.183-198. Masahiro, I・Takehiko, T・Hui, J・Kazuhiko, I(1998) *Dorama Daichi no Ko wo Kensyosuru, Utsunomiya Daigaku Kokusaigakubu Ronshu*. Vol.6. 183-198.
- 山崎豊子(1999)『「大地の子」と私』。東京：文芸春秋社。Toyoko, Y(1999) *Daichi no Ko to Watashi*. Tokyo: Bungeishunjusha.
- 野上孝子(2015)『山崎豊子先生の素顔』。東京：文芸春秋社。Takako, N(2015) *Yamasakitoyoko Sensei no Sugao*. Tokyo: Bungeishunjusha.
- 王晶・王亭亭(2015)「山崎豊子笔下的中国东北日本遗孤——以《大地之子》为中心」『日本研究』1期。 pp.84-89. Wang, Jing・Wang, Tingting(2015) *Shanqifengzhibixiade Zhongguodongbeibenyigu yi Dadizhizi, Nihon Kenkyu* Vol.1. 84-89.
- 無署名(2014)「日本开拓团的真相和《小姨多鹤》背后的故事」『大众网·齐鲁晚报』。2014.8.31. 6面。Wu, Shuming (2014) *Riben Kaituotuan de Zhenxianghe Xiaoyiduohu Beihou de Gushi, Dazhongwang·Qiluwangbao*. 2014. 8.31. 6面。
- 王欢(2007)「日本“残留孤儿”：没有终点的“旅行”」『世界知识』第12期。2007. pp.57-59. Wang, Huan(2007) *Riben Canliuguer: Meiyou Zhongdian de Luxing, Shijiezhishi* Vol.12. 57-59.
- 朱琳(2017)「相同的题材 不同的表达——山崎丰子《大地之子》与严歌苓《小姨多鹤》的比较研究——」『中国科技经济新闻数据库 教育』2期。 p.62. Zhu, Lin(2017) *Xiangtong de Ticao Butong de Biaoda: Anqif Engzi Daidizhizi Yyangeling Xiaoyiduohu de Bijiaoyanju Zongguo Kejingjixinwen Shujuku Jiaoy*. Vol.2. 62.
- 杨晓文(2012)「论严歌苓的小说《小姨多鹤》」『华文文学』第5期。 pp.29-35. Yang, Xiaowen(2012) *Lunyangelingdexiaoshuo Xiaoyiduohu, Huawenwenxue* Vol.5. 29-35.
- 魏冬峰(2008)「北大刊評·又一个隐忍执著的东方女性——评严歌苓新长篇《小姨多鹤》」『西湖』10期。 pp.108-114. Wei, Dongfeng(2008) *Beidakanping·Youyige Yinrenzhizhuo de Dongfang nuxing: Pingyangeling*

Xinchangpian Xiaoviduochu. *Xihu* Vol.10. 108-114.

※『小姨多鶴』の日本語訳は筆者によるものである。

### 単援朝 Yuanchao SHAN

(日本) 崇城大学総合教育センター教授。「満州」文学、芥川龍之介研究。「大内隆雄的“満洲文学”実践——以大連時代の活動を中心——」(『外国問題研究』総第215期, 2015年第1期)、「殖民地“満洲”的无产阶级文学运动(1930-1931)」(『東北亜外語研究』総第9期, 2015年第2期)。「漂洋过海的日本文学——伪满殖民地文学文化研究」(北京: 社会科学文献出版社, 2016)など。